第4回 忘れられない看護エピソード
入選
一般部門

「内緒の注射」は思いやりの言葉

【花澤（はなざわ） かおり・兵庫県】

くも膜下出血の手術が成功し、大喜びしたのもつかの間、母は術後2日目に始まった、脳血管攣縮（れんしゅく）の耐え難い激痛で、常軌を逸していた。集中治療室内には、「注射して！　注射して！」と、痛み止めの注射を欲して叫ぶ母の声が哀れに響き、私は逃れようのない現実を直視できずにいた。

激痛を引き受けてもやれず、掛ける言葉さえ見つけられず、助かったことさえもが結果的に母を苦しめることになったのではないかとまで思い詰め、切なかった。「頑張れ」などという薄っぺらい励ましの言葉は、もはや母には通用しない状態で、私は自身の不器用さを嘆き、途方に暮れるほかなかった。その時だった。「辻さん、痛いなあ。先生には内緒で、次の注射、予定時刻より早目にしよう。内緒の注射するから、もうちょっとだけ我慢してね」

そう母に語る優しい声の主は、看護師さんだった。その声を聞いた瞬間、私の中から不安は消滅。痛がり続ける母も、途方に暮れる私も、決して孤独ではないのだと思い知った。

母に語られた言葉は、看護師さんから私への、「安心してください。私たちが、お母さんの痛みと向き合い、全力で支えていきますから、心配いりません」という心強くて、責任感に満ちたメッセージであると確信した。

でも、「内緒の注射」と聞いて、ちょっと笑ってしまった。医療上、そんなことは断じてできないと私にだって分かる。それなのに、その言葉を聞いた時、うれしくて胸が開いた。

当然、母には痛み止めの「内緒の注射」はされなかったが、私の心には、安心感と心強さのエキスがたっぷりと詰まった言葉の「内緒の注射」を看護師さんが打ってくれた。

母は後遺症ゼロで今を生きている。あの時の光景を思い起こすたび、感謝の気持ちがあふれ出し、笑みが浮かぶのだ。